

どは各学校や団体へ無償で渡しました。しかし、個人には渡しませんでした。トラックは、残務整理に協力した者に渡しました。

今にして思いますと、海軍の教育は良かった。在隊中のことですが、別れるとき、どこかへ行く時も、転勤する時も、「帽振れ」と号令して皆で見送ったもので、良い思い出です。教育中のバッタ（堅い棒で尻を叩く）を私は一度だけしか食わなかったのですが、団体としてはやられました。

また、人間関係も良く、恩給の申請の時の証明者として心良く引き受けてくれた戦友もあったし、出水航空隊の時は近くにある航空廠から食糧など差し入れてもらい、随分助かった思い出もあります。同じ海軍の仲間同士ということなのです。

私は復員後、就職先も少なく、志願兵ですので入隊前はどこへも勤めておらず、悩んでいましたが、軍人であったため、住友化学工業の保安課に入りました。その後、塩化ビニールの製造の部門にかりました。

同じ航空隊で同じ釜の飯を食べた仲間が、五十余年

経過した今日まで交友が続いていることは、戦友愛のお陰であると今も思っています。

生死一如 — 特別攻撃隊戦記(三) —

茨城県 長 沼 武 治

沖繩特攻

昭和二十(一九四五)年五月二十三日、最後の外出は正規の時間に帰隊した。ここに至っては何もすることはなく、防空壕内でペアの連中とトランプに興じていた。遺書も書いた。幸い桜井中尉が土浦の出身で要務士官だったので遺書の投函をお願いした。色々長い文句の手紙を書いた。二十四日の外出は許されなかった。

「明朝〇五〇〇、準備の出来た者から発進せよ。出撃員の身の回りは残った者が面倒を見よ」との連絡があった。当たり前だ、明日から神様になるのではないか、と思いつながらその連絡を聞いていた。夜はいつも

より早く寝た。明朝〇四〇〇の「総員起し」に遅れをとっては一生の恥である。まして一番機を狙うのが私の考えである。その晩は飛行服を着たまま寝台に入り、私はグッスリ安眠を貪った。

二十五日の朝の「総員起し」は今までの勇ましい号令とは違って、静かにいたわるようにも聞こえたが、私は飛び起きた。そして、指揮所である野里小学校に集合した。まだ暗い校庭に隊員が集まるが人の顔もよく判らない。名を呼び合って各ペア毎の整列をする。先日、小松基地から転出してきた我々と、基地に残っていた五機を交じえた出撃数十一機の搭乗割の黒板を見ると、私は五機の中の一機二十七号に搭乗するわけである。

搭乗割を確認してみると、子供「桜花」の搭乗員の中に、美保空で教員助手をしていた丙飛仲間の徳安一飛曹がいたので声をかけた。私は彼に「俺は二十七号だ、俺の飛行機に乗らんか」「搭乗割を変えるわけにはいかんだろう」「岡本と交替してもらったらどうか」と私が言うと「それは出来んだろう」そんな会話を交

わしていた。また、誰の母機に乗ったところで還れるものではなし、その先の話をしたとて無駄なことであった。

この徳安は二十歳、白いマフラーからのぞいた顔は、女かと思ふほどの色白の美男子、優しい顔であった。この徳安は私の同期生の国村の操縦する母機の子供として遂に還れなかった。生還した私にしてみれば、ペアの交替をしていたらと思つた。もし、ペアの交替をしていたら、岡村が還らなかつたとなると、徳安も一生心苦しい思いをしただろうと、軍隊は運隊なのだなと考へた。

司令・岡村春基大佐から攻撃命令が出た。「慶良間列島周辺の敵艦隊を撃滅せよ。お前達の命は私が貰つた。私も、お前達ばかりはやりはせぬ。必ず後から征く。皇国の存亡まさに諸君の双肩にかかっている。折角の成功を祈る」との命令、訓示が済んで、皆蜘蛛の子を散らすように分かれ、用意のトラックに分乗する。人の顔が判るほどに明るくなってきた。

久藤中尉や田村が「長沼しっかりやれよ」と励まし

てくれる。私は新たな感激も、悲壮感も湧かぬまま「うーん、大丈夫」と応答した。久藤中尉と田村は子機の徳安を連れて行くのだ。顔は興奮している様子で真っ赤であった。

我が愛機二十七号は、徹夜の整備を既に終え、エンジンはかけられており、担当整備員は「異状なし」を告げてくれた。胴体には、子機「桜花」がしっかりと抱きかかえられている。私も「この腕一本で、この大きい母機一式に、子機まで連れて行くんだ」と、自分で自分の誇らしさを感じたのだった。

「おーい、しっかり頼むぞ！」「頑張れよ！」「お土産頼むぞ！」など、その声に皆笑って応えて機上の人となる。誰よりも早く発進したいと心掛けながらも、一応機内の点検、エンジンの調子等をチェックし出発するのが建て前である。整備員の御苦労には常に感謝し、絶対信頼しているが、今日の出撃は特別である。「すべて異状なし」を確認する。

副操縦士が車輪止めを取る合図に天蓋を開け、両手を前に挙げて開く。整備員二人左右の車輪止めを外

す。いよいよ発動。副操の曾田兵曹の手信号で滑走路に誘導される。各機とも、そちこちの掩体壕に分散しており、誘導路に近い一機が私の前に出たので、私は二番目の発進となってしまった。

午前五時五分、私の今までの総飛行時間は九七五時間、今日の飛行時間を入れても一〇〇〇時間に満たない若輩パイロットである。それが、最大重量の離陸発進をする。慎重に操作を心掛け、地面を離れると同時に機首を少し押さえめにして、充分の気速を待つて上昇の姿勢に入る。地上では、見送りの隊員が旗や帽子を振っている様子を頭描きながら懸命の離陸である。

後続の僚機を頭に描きながら、私は一路南の空を目指して上昇する。気速百ノット、一メートル／秒の上昇率である。今までの巡航一六〇ノットと比べると、じれったい思いの飛行であるが、子機を連れているので仕方がない。

積み込んだ弁当は、出撃員だけしかお目にかかれぬ主計科念入りの銀飯（米だけ）の寿司である。「おー

い、皆弁当を食べろ」と言った。九州名物枇杷も入っていた。弁当はきれいに頂いた。あと二、三時間で「男の中の男」と讃えられ、悠久の死を信じている私であった。今、この期に臨んで飯を美味しく平らげるのであるから、常と何等変わらぬ気持ちであった自分が、今でも不思議に思えた。

開聞岳の奇麗な姿を左前下方に見た時、夜が明けてきた。「離陸後基地に還らず、されど我れ等はお盆に帰ろう」などと考えながらの心境であった。各自見張りを厳重にするよう呼び掛けた。敵機か、友軍機かの判断がついてからでは遅いと出撃前に言っている。眼はまるで鷹のように鋭い。

離陸後、どのくらいの時間が経ったのだろうか、大きな雲が右から左へと流れていく。その雲の中に、胡麻粒ほどの機影を確認した。私の眼力はよかった（左右とも二・〇）。勿論、敵機とも味方とも判らぬが前方右から左へ、雲の流れに乗っているように見えた。

私は咄嗟に怒鳴った「オーイ敵機だ！ 回避する」と言うなり高度を下げスピードを増した。その時の高度

は三五〇〇―四〇〇〇であった。

折角高度をとって来たのにも思いながらも仕方がない。幸い前方の白い雲は、我が機に接近し、ふくれ上がってきた。「しめた」と思い、その雲に包まれたら機外は真っ白で何も見えない。高度は二三〇〇で、今から高度の挽回も容易でないと思った。そのため早く雲から出たいと焦っているが、雲はますます厚くなるばかりか、雨も混じって来た。南方特有のスクールの中へ入ってしまったらしい。風が防風ガラスに斜めに叩きつける。計器飛行をしたが十分ともたぬ。

私は、自動操縦装置を使ってやろうと思い、その切り替えをした。しかし、私如き未熟者は練習生の時二、三回訓練しただけであった。手操、自操の目盛をよく合わすべきなのにその余裕さえ失っていたのである。しかし、手操、自操の切り換えと同時に愛機はグラグラと凄い震動を起こしたが、すぐに平常に戻り助かったのである。ボタン一つの操作で上昇、降下、針路修正が出来るようになった。私は自操の計器を信用して、なるべく外界を見ないようにし、山下機長指

示するよう針路に「ヨースロ」を飛行した。

私は「征け！ 征け！ 愛機。獲物を求めて！」と、見張りの必要ないスコール雲中飛行なので、「桜花」搭乗員の岡本文明兵曹を見た。彼は特進して士官になっている。それにしても彼の寝姿は大胆である。離陸直後から眠り始め、急激な飛行にも、震動にも、全然眼を覚まさない。死を目前にして眠り続けるその姿に、ただただ恐れ入ったり、生死一如の手本であると感じたものである。そして、自分もその中に居ることも忘れて。

約二時間余り飛行したあたりで、機長が「九〇度変針、ヨースロ」と伝えて来た。高度はやつと五〇〇〇になったろうか。岡本兵曹をゆり起す。彼は母機乗員の我々全員に握手を求めてきた。「長沼兵曹、行きませ。後を頼みます」「しっかり頼むぞ！ お前が成功すれば俺達も後から行くからな」私達のペアが後から行く約束をしてあることは、彼は知らない。お互いに固い握手を交わした。

それから十分ほどして突然機内は真っ白なガスに包まれた。私は「やられた！」と瞬間吃驚して後席を振り返って見た。搭整員野口幸一飛長が、炭酸ガス瓶を持って笑って立っている。「おい！ どうしたんだ！」彼は「いよいよ戦場到着なので、今まで使用した燃料タンク内にこのガスを吹き込んで、気化したガソリンの爆発防止作業をしたんだ」と説明してくれた。岡本兵曹は桜花機へ乗り移った。彼から「準備よろしい」と連絡があった。

そして機長から「戦場到着五分前、皆笑って死ぬぞ！」と、実に立派な発声で宣した。さすがである。皆「OK」と答えた。それで私も、一度笑いの練習を試みた。何だかうまく笑えない。両頬がこわばっているのを覚える。曾田を見る。曾田も私を見る。笑っているのだが、この笑いは本当の笑いに見えたらうか。

雨は篠突く程に、風防のガラスを叩く。外界は何も見えない。手足を放した操舵は、ひとりでピクピク動いている。多少高度を下げれば何かの目標がつかめる

かもしれない「高度を下げる」と降下の姿勢に入った。四〇〇〇—三〇〇〇—二〇〇〇—八〇〇になつていた。

戦場到着！ 「桜花」投下！

機長から「戦場到着！」の声。鹿屋基地発進後、二時間四十五分である。と同時に敵対空砲火が、万雷のように打ち上げて来た。手放している操縦桿、足踏桿が今までは、ピクピクだったものが、途端にガクガク揺れだした。相当な至近弾であろう。愛機の爆音など問題ではない。機外に雷のような爆発音が機の揺れと共に聞こえる。

「やあー、来た来た」と言いながら、急いで自操を外したが、愛機はかえって揺れるばかり。「桜花」に乗った岡本からは「飛行機をセットせんか！」と怒鳴って来た。雲中飛行に自信のない私は、かえって危険な操縦となった。高度七〇〇メートルまで下げた。しかし、外は豪雨で見えない。視界零である。

私は、「これはいけない」と思った。今何も見えない

いここで「桜花」搭乗員を乗せて投下することは忍びない。私は「桜花機のみ投下する。搭乗員を親機に移せ」と怒鳴った。岡本兵曹が親機に戻ったのを確認して、投下器のスイッチを押す。落ちない。どうしたのだろう。二回、三回と強く続けて押したが駄目、愛機は慌てた主の操縦にあれば出した。飛行修正がだんだん大きくなっていく。

ままよと、咄嗟にまた自操に切り換えた。目盛りの調整縦の線は合わせたつもりだったが、前回同様、ガラガラランと凄い震動を感じた。それでも、一心自操に切り換えたが、この時の顔こそ一生に一度の私の真剣な顔であつたらう。

これで大丈夫と、操縦桿から手を放して、手動で足踏桿の内側にある把手を力いっぱい引いた。「桜花」スイッチが作動しない場合の補助装置である。無人「桜花」はストンと落ちた。愛機は二トン余りの子供を産み落し、身重から解放され、グリーンと浮き上がった。搭乗員の体がグッと床へ押し付けられる。

対空砲火は敵の電探射撃によるものだろうが、止め

ず万雷の響きである。これでは到底生還などは思いもよらない。覚悟の上ではあるが、成功せずしてここでやられてはたまらない。と、搭乗員、攻撃員、電探員が、ランプ箱いっぱい詰め込んだ電探欺瞞紙とやらの銀（錫）紙を、各銃座から投下している。私は、こうなったら速度を増して戦場脱出が第一と思ひ、スロットレバーを全開し、高度を五〇〇、四〇〇、三〇〇メートルと下げた。「桜花」攻撃時の我が方の高度も敵は知っているらしい。それを低空の、しかも拙い、躍つての飛行、これが事実上は避退行動をした恰好となつて、敵の弾幕を避けることが出来たのであろう。とにかく、敵弾幕から逃れて我が愛機の爆音のみ耳に入る。機長が「針路〇度」と指示した。見事戦場脱出に成功したのだ。先程までの慌て方が徐々に解消していく。左右エンジンの音もよく同調しワンワンと唸る。馴れた耳にはこの音がたまらなく楽しい。往きにも岡本が心地よい眠りに入っていたのも、そのためかもしらぬ。

搭整員野口が私の所へ来て「長沼兵曹、燃料が足り

ません。ECを使って下さい」と言った。ECとは、燃料と空気の混合比を適切であるかどうかを知る計器で、この目盛の調整により燃料の節約が出来る装置である。しかし、高度二〇〇か三〇〇の低空ではその必要はない。空気の希薄な高々度においての操作に必要なのである。私は「OK」と答えた。

戦場脱出後

戦場脱出して一時間後、雨も小降りとなり、真っ白な雲中飛行となる。極地の白夜とはこんなのだろうかと思像する。なるべく外界を見ないようにして、機長の指示する「一〇度右ヨーソロ」「五度左ヨーソロ」自操のボタン一つで操作している。雲中飛行で見張り不要の御帰還である。

私以外の十機の成果はどうだったろうか。この天候で到底成功は望めないが、この天候でもあの対空砲射撃、天候が良くなればなおさら我に利ありと見た。無事帰還していればいいがと、僚機のことまで案ずる余裕が出てきた。燃料の増し積みをせぬ僚機のこと

配である。

今日の出撃に還らぬと思った基地に懸命の飛行である。先程、敵上空で勇ましくも、また、お粗末な飛行サーカスをして来た私は、何か大変悪いことをしてかしたような、変な気持ちで飛んでいる。

次第に雲も薄くなり、スーッと目の前が青く見えた。こうなると途端に見張りが忙しくなる。海面を低く一〇〇〜五〇メートルで飛ぶ。高度を取ると敵機に遭遇した場合、反復攻撃をされる恐れがある。海面を這って飛行すれば敵機は我が頭上のみで攻撃をかける。まかり間違えば突っ込みすぎて海中にジャブんとやる可能性もある。「いつでも敵さん、ござんなれ」と上方全面の見張りをする。敵の攻撃軸線を反らすため、横滑りの飛行操作を繰り返し数回、右に左にやってみた。横風がサーッと風防に当たる。

右前下方に小さい島が見えた。徳之島らしいと機長が言う。往きの飛行に雲中に入ったあたりである。島がポチポチ出てくる。快晴、綺麗な南の青い海と青い空に様変わりする。しかし、燃料が残り少なくなっ

て、野口が燃料の残量を機長に報告している。

早く九州に滑り込みたいと祈る気持ちに、気速一六〇ノットの愛機が遅かったこと。前方に開聞岳が見えたときは、機長に「あそこまで飛べますか」と私の方から聞いた。もういたずら飛行をしている余裕はない。一目散に、九州本土で一番近い飛行場か、不時着地はないかと探し求めて、そこへ機首を向けることだけである。やっと、九州最南端の飛行場を見付け、機首をそこへ向けた。「長沼兵曹、燃料がありません。やり直しは出来ません」と野口が声をかける。

私は「OK」そのままパスに入る。馴れぬ飛行場だ。高台で周りの低い所に民家がある地形である。機長が心配して私の後へ来て、「慎重にやれよ」「燃料ゼロ、やり直しは出来ぬからな」と盛んにアドバイス。スロットルレバーを全開して機を浮上させ、そのまま滑走路に滑り込んだ。あわや、飛行場の土手に衝突かと思われた瞬間であった。

無事愛機の止動を見た時、全く「ホッ」とした気持ちであった。神の助けと思わざるを得なかった。その

時伝令が駆けてきて、「只今警戒警報発令中でありませす。飛行機を分散待避してください」と敬礼する。陸軍の兵隊である。頷いて、陸軍地上兵員の手を借りて、飛行場の端へ愛機を移し偽装する。これが、陸軍の特攻基地知覧の飛行場であった。

知覧飛行場へ不時着

指揮所にいた週番士官に挨拶して「ただいま慶良間列島の攻撃から帰った。燃料不足のため当飛行場に不時着した。鹿屋までの燃料を補給して欲しい」旨を頼んだ。飛行服に階級章もつけていなかったので、平気で無心が出来る。週番士官は私を海軍士官と思ったらしく、「はい、燃料は何でありますか」「ガソリンであれば何でもよろしい」「は、ここには九七だけであります」「九七で結構、願います」。お世話になるのに横柄な口のきき方をし、後で申し訳なかった思ったが、我が方はたしか九二を使用していたと思う。ここで、二度日の燃料の積み増しが出来た。

中野電信員は「二十七号、燃料不足のため知覧に不

時着」の要旨を基地に打電し、了解の応答があった。知覧で不時着用の食糧を開けて見た。中には乾パン、ウイスキー、鯨節親指犬、チューブ入りチョコレート、熱量食、外に二、三種の菓子類があったように記憶している。「帰路、あの雲中、雨中の飛行で、一分一秒の狂いなく基地に辿り着くことができたのは、山下機長の航法の正確さに外ならない。敬服の極みであった」と機長に申したら、「私の拙い操縦で帰れたとは、信じられない。私はまだまだ技量錬磨の要ありと痛感したよ」と機長はただ笑って報告書を書いていた。

さらに私は「桜花」搭乗員岡本兵曹に「岡本兵曹、あの時落下させたら帰れなかったな」と水を向けた。初めての今朝の出会いでペアの空気に馴れない彼、そして死ねなかった彼、複雑な感情が脳裏に錯綜しているのだろう。「あれではどうしようもないですよ」「徳安兵曹はどうしたかなあ」「徳安を知ってるのか」「うん、俺と美保空で教員助手をしていたから俺のに乗らんかと言ったんだが」「おかげで何日か命が延びたよ」

「無駄死にしてももったいない。またの機会がある。成功しなければなおさら死ぬものな」。私は、自分の操縦のお粗末を棚に上げ、少々威張って見せた。

私は、岡田兵曹が、子機「桜花」に移って「準備よし」と言った後「この下手糞！ 飛行機をセットせんか！」と怒鳴ったことを思いだした。死を決し、敵艦を撃沈しようとした岡田兵曹の言葉は当然であったと思う。

また、私が何度ボタンを押しても「桜花」は落下しなかったのはなぜか、野口搭乗員に聞いた。彼は、機長の方をチラッと見て「あれは、投下器用の電源のスイッチが入っていなかったそうです。これは機長のお役目だったらしいが、機長も慌てていたらしい」と野口がちよっと言ったら、機長は頭をかいて笑っておられた。

このような、内輪話をしていたが、知覧の警戒警報が解除になったので、狭い飛行場なので注意して離陸し、基地にある野里小学校の指揮所目指して低空で飛び、大きくバンクして着陸「ただいま、帰投」の挨拶

をしたのだが、総員出迎えを受け、愛機を掩体壕に格納した。

機長は、指揮所で司令岡村大佐に概ね次の如く挨拶をされた。「第二十七号、慶良間列島攻撃、ただいま帰りました。〇五〇五飛行場発進、〇五三〇敵戦闘機らしきもの三機発見、雲中に避待しました。その後、高度をとりつつ針路〇〇度〇七三〇、九〇度左変針、〇七五〇戦場到達、高度五〇〇〇。途中雨のため高度を一五〇〇まで下げましたが、敵艦船を発見出来ず。

止むなく桜花機のみ投下しました。途中の雲量一〇、視界零自操で飛行しました。帰投中燃料不足のため、陸軍知覧飛行場に不時着しましたが、警戒警報発令中でありましたので、解除を待ち帰投しました。人員兵器異状なし。終わり、敬礼」

いちいち頷きながら聞いていた司令が、私達整列の一人一人の顔を覗き込むように見る。司令は搭乗割の黒板を見て二十七号の操縦員は長沼だと覚えていたのか、「長沼兵曹、自信はついたか、どうだった」と聞いた。私は素直に「とても駄目でした。自信はありま

せん」とは言えなかったので、「は、はい」とのみ申した。この攻撃作戦には、神様といえども自信はつくまい。そして司令は並んでいる曾田兵曹、攻撃員の山口を見て「これはどうしたんだ？」と機長に聞いた。緊張して整列しているときであるので、何が何だか誰も判らない。誰も返事のしようがない。そして次の言葉を待っていると、司令自ら合点したらしく、「おお、よしよし、皆ご苦労だった。二十七号を入れて四機が還らぬので案じていたが、今日の天候では攻撃は無理だった。またの機会もあることだから、後の三機も無事還って欲しいと願っている。今日は充分休養を取るように」と言って別れを宣してくれた。

ホッとして別れて、曾田や山口の顔を見て驚いた。知覧で召し上がったウィスキーが効き過ぎたのか、アルコールに弱いのか、金時の「火事見舞い」の顔になっていたのである。要務飛行中飲酒は許されぬだろうし、備品の糧食を頂戴してしまったのだから、平時だったら問題になったろうと思った。

待っていた同僚が「貴様も死んだかと思っていたの

に、よく帰って来たな」と寄って来た。「憎まれっ子世にはばかるさ」と言った。黒板の搭乗割には未帰還の四機に×印がされていたが、私の二十七号は俄かに取り消しの赤い○が付けられていた。知覧からの連絡がついていなかったのであった。

七号作戦の時、私の主操だった太田は、この日状況判断よろしく早目に途中から引き返し「桜花」を抱いたまま着陸したそうだが、一歩間違えれば飛行場も吹き飛ばすほどの危険な芸当であった。十一機出撃中、敵中深く侵入し、敵の弾幕をくぐり帰投したのは、我が一機だけであり、燃料の増し積み、偵察員の航法技量の優秀さのおかげで辛うじて帰還出来たのである。

この神雷桜花作戦一号から十号の一式陸攻投入機数は四十七機だそうである。戦後『丸』という雑誌を見た時、神雷桜花攻撃についての模様が掲載されていたが、その中に、五月二十五日の九号作戦には、日本の桜花攻撃は一機で、一型巡洋艦ルイスビル大破と戦果が載っていた。してみると、やみくもの桜花大の投下は私のやったものに間違いない。この雑誌『丸』の発

表は米側のものであり、確かなものであると信じる。あの時、彩雲偵察機の、敵艦隊の写真を見た時、どこへ投下しても命中するような気がしたほどの敵艦船群であったからである。

再び小松基地へ 終戦

別命を受け小松基地へ帰ることとなった。「今度は死ぬ」と出撃し、泣いて送ってくれた基地の友や、民間の人達に恥ずかしい気がしないでもないが、この戦争が続く限り、遠からず、あの世から迎えが来ると思い、前進基地鹿屋から二度目の小松へ帰った。

別命と言ったのは、一つは今までの「桜花」攻撃は、昼間単機攻撃、護衛掩護機なしで、鈍重・遅速（桜花を搭載するから）では成功率が極めて低い。大事な飛行機と人員を消耗するので作戦を変える必要に迫られた。

これは、第一号作戦後から論じられた話である。「桜花」も小型に改造し、夜間戦闘機「銀河」に、この「改桜花」を搭載するというものである。我々は銀

河の操縦訓練目的のため、小松に帰ったのであるが、ここで二つに分けられた。もう一つというのは、青森の三沢基地に試作された「連山」という超大型四発の攻撃のため出来た機で、そこで半数は、この「連山」の操縦訓練と陸戦要員として三沢行きとなる。

私は小松に残り「銀河」の操縦訓練となったが、肝心の「銀河」が来ないまま、一式陸攻M2の夜間訓練を毎晩・毎夜、休みなく行っていた。米軍の沖縄上陸、長崎・広島に特殊爆弾（原子爆弾）が投下された。そんな敗戦色の濃い我が日本の空を、それぞれ死守するのだと、残り少ない飛行機に分乗しながら、黙々と訓練に励んだ。

鹿屋から帰って二カ月、その日は灼熱の真夏であった。「本日、一二〇〇、第一種軍装に着替えて、指揮所前に整列せよ」との通達があった。我々搭乗員は飛行服のまま整列し、あの沈痛な敗戦の玉音をラジオを通して聞いたのである。昭和二十年八月十五日であった。血の出るような訓練も、努力も、そして鍛え上げられた闘魂・気迫も、一度にヘナヘナと萎えてしまう

ようであった。

一同解散し、大声で泣く者、怒鳴り散らす者、指揮所前は一時騒然となったが、如何ともすることが出来ない。宿舎へ帰る道々では、徴用の女子工員にも泣きつかれた。「まだ負けないぞ、今から攻撃に行く」などわめき、ある者は「白山へ機銃を持って立てこもる」と騒ぎ、「米軍には負けたが、ソ連の野郎共と一戦交えよう」と氣勢をあげた。その晩は、酒のあるだけ飲める者は飲み、泣く者は大泣きに泣いた。

翌十六日には身の回りを整理、そして航空記録、その他飛行兵である証拠品、写真等は一切焼却するよう分隊長から通達があった。十七日は、各航空隊基地別に、飛行機を配分され、茨城方面は霞ヶ浦航空隊へ行くように指示された。神戸分隊士と私が操縦して茨城方面の隊員を、重量の許す限り乗せることにした。

十八日には休暇という名目で、基地に残っていた一式陸攻七機が、各地方別に飛び去った。これで部隊は事実上解散したわけだが、三沢基地へ分かれた半分の動静は、この時点では判らなかつた。

我が機は二十数人を乗せて霞ヶ浦に着陸、私の生家は二キロの所にあるので、難なくその日の午後、我が家へ帰った。

桜花機もごも

「桜花」という殺人機が、何の抵抗もない空から投下出来るなら成功もあるだろう。戦争となれば相手がある。まして劣勢の戦場下、制空権を握られている所で、時速百ノット、しかも高度五〇〇〇くらいでは敵の餌食になるのは当たり前である。戦死された方々は申し訳ないが、前後十回のこの作戦で成功を確認出来たものが何機あるだろうか。

酒井兵曹と私の「米軍発表、巡洋艦ルイスビル大破」のみが、生存者の証言で、他は戦死されたので未確認である。戦死したから成功したと言えないのがこの作戦であった。

もし、高度一万メートルで飛ぶB 29あたりに搭載すれば戦果が拳がったかも知れない。あの敵砲火の真っ只中へ突入して、万雷とも覚しい音響を機外に聞き、

その震動を肌で感じた私は、まさに九死に一生を得た生還者だと思う。技術者の発想のみでは実戦に役立つないのであることを、痛切に感じるものである。

しかし、現在の日本民族が平和でいられるのは、このような犠牲があったからこそと、自らに言い聞かせ、諸霊の安らかに眠られんことを祈るのみである。

第十三期予備学生

我が青春は海軍航空隊

岩手県 加美山 茂

私は大正の末期に宮城県の県北に生を享け、岩手県で七十有余年を過ごした。考えてみると、その少年時代から青春時代の歳月は既に半世紀以上経っているのに、まさに昨日のことのように鮮明に、人生の大半がその数年に集約されたようにさえ思われる。

私は体格の良いスポーツ少年であった。昭和十四年、当時の少年の憧れの的であった海軍兵学校と陸軍

士官学校の両校を受験したが、いずれも予想に反し、その体格検査で不合格になった。昭和十六（一九四一）年盛岡高等工業学校に入学、昭和十八年、徴兵検査を受け甲種合格、同年九月繰り上げ卒業、日立精機に就職が決定したが、当時は兵役優先でまず軍隊に入らなければならなかった。

私は親戚に海軍関係の者がいたことと、空に憧れていたので、海軍予備学生として昭和十八年九月に茨城県土浦の海軍航空隊に入隊した。そこは自由だった学生生活に比較して、天国と地獄、娑婆と牢獄という環境の変化に度肝を抜かれたのは恐らく私だけではないかっただけかと思う。

「貴様達は彼等の指揮官にならないといけない立場にあるのだから、常にその覚悟で彼等に優る鍛錬に努めなければならぬ」と短時間で、海兵で学んできた人達に少しでも近付けるように、まさに火の出るような教育が実施された。座学も体育もすべて無理に押し込むような、闘争心を掻き立てるような内容だった。